

北九州市立大学

文学部紀要

第91号

Adventures of Huckleberry Finn における Jim の人物像
— 奴隷制と Huck への Jim の対応を巡って

前田 譲治 ……………49

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2021

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

No. 91 March 2021

CONTENTS

The Characterization of Jim in *Adventures of Huckleberry Finn*
—With Special Reference to Jim's Posture towards Huck and Slavery
Johji MAEDA49

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2021

Adventures of Huckleberry Finn における Jim の人物像

— 奴隷制と Huck への Jim の対応を巡って

前田 譲治

要約

『ハックルベリー・フィンの冒険』に登場するジムの描写を精査すると、逃亡に際して発揮する判断力や、情報処理能力の秀逸性が特徴となっている。また、ハックに対するジムの対応は一貫して、極めて的確な判断に基づいた上でなされており、結果的に、奴隷制下ゆえに白人ハックとの間に存在しているはずの序列を形骸化し、さらには、ハックの発話や情緒に至るまで支配する状況を創出している。このような思考力の卓越性や、ハックとの間にジムが確立した関係の本質を、ジムは演技によって巧みに隠蔽している。このジムの戦略は当時の奴隷制の実情を勘案すれば極めて妥当であると評価でき、究極的聡明さこそが、ジムの人物像の本質といえる。

キーワード

Adventures of Huckleberry Finn、Jim、Huckleberry Finn、奴隷制

序論

Adventures of Huckleberry Finn における Jim の人物像の解釈には、対照的な二つの方向性が見られる。まず、ジムが Huckleberry Finn に示す善意や慈愛、あるいは自己犠牲にジムの人物像の本質を見出す立場がある。この立場を採用する論考としては、(Hoffman 333)、(Jones 162-63)、(Martin 62)、(Nichols 212)、(Shulman 330)、(Smith 105, 115) など多数が挙げられる。他方、保身を念頭においてジムがハックを巧みに利用する在り方に注目し、自己の利益を追求する能力の卓越性にジムの本質を見出す立場も見られる。この視点からのジムの人物像の解釈を展開している論考としては、Robinson (“Characterization” 211, 220-21)、Beaver (189-90)、Cox (175) などが挙げられる。本稿では少数派の後者の立場に立ちつつ、ジムの人物像の本質を確定する上で重要であると考えられるも、後者の論考において、議論の俎上に乗らなかった描写を中心として、ジムの人物像に関する論考を展開したい。また、作品の語り手は主人公ハックであるため、ジムは常にハックの視点から描出されている。そのため、ジムの描写は必然的に、ハックとの関係を読み解く鍵となる。つまり、ジムの人物像を考察することは、ジムとハックの関係の本質を探究することへと連なる。この考察

に加えて、ジムの奴隷制への対処姿勢が、どのような本質を有しているのかも明示したい。ハックと奴隷制に対する、ジムの対処姿勢のあり方に注目することにより、ジムの人物像の本質を再確認することを、本稿の目的とする。

I 逃亡に対するジムの姿勢

ハックは pap から逃亡した後に遭遇した逃亡奴隷ジムに、逃亡に関して“the whole thing” (54) を伝えている。この結果、当然ながら、父親による致命的暴力がハックの逃亡の主因であることをジムは把握する。その後、川面の漂流家屋で目撃した男性死体がハックの父親である事実をジムは確認する (61-62)。ここにおいて、ハックの逃亡の最大の動機が消滅した事実を把握した (Cox 175) ジムは機転によって即座に、死体の顔に布を被せている。ジムが即座に口実を設けて父親の死体を布で覆ったため、死体の詳細を観察する機会を逸したハックは、その後、男性死体に関する話題を好奇心から持ち出す (63)。するとジムは、葬られていない状態の死体について語ることが招く崇りの脅威を強調し、男性死体へのハックの言及を2度も阻害している。それに加えてジムは矢継ぎ早に、複数の崇りの実例を列挙し、崇りの実在性をハックに印象付けている。このようにしてジムは、漂流家屋で遭遇した死体についてハックが思いを巡らせ、死体が父親である事実をハックが認識することを、可能な限り阻んでいる。このように、ジムの逃亡が成功を収める上で不可欠なハック (Robinson, “Characterization” 210) が帰郷を決断し、ジムとの同行を中止する可能性を、巧みな話題の選択を通してジムは低減せんとしている。

その後ジムは、ハックが提供する情報から、自身がハック殺しの容疑者と誤認されている事実も把握する (74)。つまり、逃亡中のジムが捕縛された場合には、ハック殺しの冤罪を晴らすために、ハックが生存している事実を語らざるをえない立場にあることをジムは把握している。この点を活用してジムは、彼の捕縛が、ハックの居場所の周知、さらにはハックの最も忌避する父親による再捕縛に直結する点、つまり、ハックがジムと一蓮托生の関係にある事実を、巧妙に暗示している (74)。このようにしてジムは、ハックによるジムの密告を阻むための伏線も巧みに張っている。以上の通り、様々な場面においてジムは、状況を精確に把握した上で、逃亡する上で不可欠なハックが彼と同行せざるをえなくなるように効果的に仕向け、自分の逃亡の成功の可能性を高めている。

しかしながら、川面の漂流家屋への侵入をハックが主張した際、夜明け直前にもかかわらず、ジムが警戒心を全く示さずにハックと同行している (61) 点には、ジムの警戒心の不備を指摘できる。なぜなら夜が明けると、所有者から追われている立場の逃亡奴隷のジムが、周囲から容易に視認されるからだ。同様の在り方は、漂流家屋の中で睡眠中と思しき素性が不詳の人物 (実はハックの父の死体) に、ジムが無警戒に語り掛ける姿にも見出せる。加えてジムは、義足やバイオリンの弓など、家屋内の無価値な物品の搬出に没頭し、家を出た際には完全に日が射し、カヌーに乗ったジム

を毛布で覆い隠す必要が生じるほど、家屋に長居している (62)。他方、後日ハックが沈没寸前の難破船への乗船を提案した際には、嵐の夜で周囲からの視認が困難な状況であるにもかかわらず、ジムは強い難色を示し、ハックの意向に逆らう (77)。しかも、ハックの強引な乗船後にジムはハックの動向を完全に無視し、難破船に係留した筏の傍に移動し、難破船からの脱出のみを念頭において行動している (77)。先の漂流家屋に乗り込んだ際には、奴隷にとっては生涯初の体験であるが故、ジムは無警戒で、その結果極めて危険な状況に自らを陥れていた。このような失策への反省を踏まえて、逃亡の失敗の回避に最善を尽くすべく、ジムは行動様式を変えている。そうであるならば、過去の失敗を踏まえて、行動様式の点で的確な変容を遂げるジムの姿が認められる。

ジムの判断力の鋭敏性に注目し続けると、蒸気船と筏との衝突によってハックと離別した際には、暗闇の中にあっても、ハックの呼びかけにジムが呼応することが結果的に捕縛を招くことを恐れ、ジムはハックを無視している (131)。他方、ハックとの離別はジムが逃亡する上で、大きな不利益をもたらすことを踏まえると (Robinson, “Characterization” 210)、発声に起因する捕縛にジムは最大限の警戒心を示していると判断できる。その後ジムは、死んだと想定していたハックと再会し狂喜するが、その際ですら、ハックに声の抑制を冷静に指示している (134)。しかし、その場面では二つの名家の白人男性全員が戦闘に死力を傾け、彼らは皆、命の危機に曝されている。ハックのような幼少の男性 (しかも名家の部外者) ですら、落命している可能性が高い点を、ジムは他の奴隷からの情報を通して把握している (134)。この状況にあっては、白人男性が逃亡奴隷の捕縛に心配りをする余裕は皆目ない。それにもかかわらず、発声が契機となって生じる捕縛へのジムの警戒心は変わらず研ぎ澄まされている。同様に、*slave-catchers* が伝染病の罹患を恐れて急いで退散し、ジムがいる筏との間に相応の距離が生じた段階でも、ジムは近接してきたハックに、即座に声を潜めるよう指示している (114)。以上の通り、ハックの発声が自己に及ぼす悪影響を常に計算しつつ行動する注意力の鋭敏性もジムは常に発揮している。

以上に確認できたジムの注意力の鋭敏性との関連で、50メートルもの距離がハックとの間に介在する川面で、ジムがハックに語り掛けた事実注意到注意したい (111)。ここでは50メートルの距離の介在ゆえに、ジムのハックへの発声は小声ではありえない。しかも、その後にジムは、彼から50メートル以上、遠くに位置しているハックと *slave-catchers* との、近接状態での対話を聞き取れている。つまり、ジムの周囲は完全な静謐が支配し、声が極めて通りやすい状況にある。そうであれば、*slave-catchers* と遭遇直前のハックに対するジムの発声は、*slave-catchers* に聞き取られている可能性が極めて高い。そもそも、*slave-catchers* は、子供のハックしか乗っていないカヌーに意識的に接近し、ハックと筏との関係も完全に把握している。このような彼らの在り方が生じたのは、彼らが聞きつけた黒人奴隷の発声ゆえと推測できる。この推測は、*slave-catchers* が、筏には白人(父)が乗っているというハックの主張を無視し、筏に奴隷が潜んでいないかを強引に確認せんと

試みた在り方 (111) から裏付けられる。

すでに確認した通り、ジムは発声や物音が発端となる捕縛への警戒心が極端に強いにもかかわらず、静寂の中、例外的に声を潜めていない。そのような危険を冒してまでジムが伝えたのは、ハックへの熱烈な賛辞である。その直前にハックはジムの告発を固く決意しており (111)、ジムの熱烈な賛辞がなければ、ハックは遭遇した *slave-catchers* にジムを確実に密告していた。しかし、ジムが送った賛辞に懐柔され、ハックはジムを *slave-catchers* から保護する姿勢へと急変する。従って、ジムの発声は白人による捕縛を招く危険性を孕む一方で、ハックに芽生えていた告発意欲を圧殺し、ジムへの救済意欲を喚起し、結果的にジムの捕縛を未然に防いでいる。このように、行動の統一性を破る形でジムが危険を冒すことによるのみ、捕縛の回避が可能となっている。ここでも、逃亡に関連してジムが下した判断力の秀逸性が際立っている。

加えてジムは、ハックのカヌーに武装した白人の乗ったボートが接近したと見るや、水中に身を浸し、逃走が即時に可能な体勢を整えている (114)。つまり、ジムの逃亡を支援するとのハックの平素の発言をジムは額面通りには受け止めず、ハックがジムを白人に告発する可能性を視野に入れて行動している。現実にはハックは、ジムを *slave-catchers* に告発する寸前に至っており、ジムを救ったのは苦渋の決断の末だった。他方、*slave-catchers* が去った後に、ジムが川の中に身を潜めている状況をハックは全く予期しておらず、ジムはハックの平素の発言を鵜呑みにして小屋の中に留まっていると想定している。つまり、現実認識の正確性の点で、ハックはジムの劣位に甘んじている。この形でも、ジムの現実認識の鋭敏性が提示されている。類例は他にもある。

ジムとハックの道中に強引に闖入してくる詐欺師の 1 人 (フランスの王族と詐称) に、ジムはフランス語での発話を要求する (150)。この行為はハックの注意を引く形で行なわれており、ジムは、フランス人を詐称する詐欺師がフランス語での発話ができない不自然さにハックの注意を促そうとしている¹。本場面のジムは、彼の逃亡にとって脅威となる詐欺師 (Robinson, “Characterization” 222) の 1 人が、詐称を行う、信頼に値しない人物である事実をハックに突き付けることにより²、ジムの逃亡にとっての障害の排除を試みている。ここで注意したいのは、以前にハックがフランス人はフランス語を話すと主張した際に、ジムはフランス人も英語を話すと強弁し、ハックの主張を最後まで拒絶していた点だ。つまり、フランス人の母語はフランス語であるというハックの説明にジムは反旗を翻す一方で、教育水準が絶対的に勝るハックの指摘を事実として密かに受け入れている。ここには、ハックとの対話を通して得られた語学的知識を、機転を利かせて保身のために活用

¹ この婉曲的な手法と並行して、ジムは詐欺師の人格的瑕疵をハックに繰り返し直接指摘している (150, 168)。

² ハックは、詐欺師が行なっている詐称 (王様と公爵) をジムが盲信していると即断しているが (142, 170)、このジムに関する判断は妥当性を欠いている。

するジムの姿が読み取れる。このような、ジムの機転の俊敏性は、以下の通り、彼の家族愛の表白の様式が変容している点にも指摘できる。

ジムは家族愛の吐露を渴望している。例えば、Solomon 王が行った子供への処遇にジムが感じる強い憤怒の根底には、子供に対する彼の愛情の豊かさを指摘できる。その次にジムが行う家族愛の表出は、家族全員の同居への熱望の形をとるため、奴隷制廃止論者との共闘を視野に入れることになり (110)、奴隷制への反逆姿勢を包含する。この視点は即時に、ハックのジムへの密告意欲を誘発し、それをハックは“I say”と我知らず口走っている (111)。既出の、ジムが敢えて危険を冒してまで発声した、ハックの人間性への賛辞は、このようなハックの感情の硬化を読み取った上での、戦略的なジムの行動と解釈できる (Robinson, “Characterization” 219-20)。ここにおいてジムは、奴隷制への反逆を包含する形での家族愛の表出が、ハックとの関係において不利益を招く現実と直面している。すると、3度目にジムが家族愛を吐露する際には、奴隷制への言及が皆無となる (170)。つまりジムは、奴隷制への反逆姿勢の表面化がハックのジムへの断罪意識を刺激する現実を正確に把握した上で、ハックの密告意欲を再度誘発しないように、奴隷制への反逆姿勢の表面化を完全に差し控えている。この場面でのジムによる家族愛の表出は、詐欺師を念頭に置きつつ、ハックの同情の喚起を目指したものである (Robinson, *In* 169)。その際にジムは、過去のハックの感情の硬化を踏まえ、より安全な表現形式へと方向転換している。その結果、ハックはジムの家族愛の表出に心動かされ、従前とは異なって、家族に関するジムの発言の聞き手となっており、ハックのジムへの態度は軟化している (170)。ここにおいても、ジムの判断的確性が描き出されている。

次いで Phelps 農場での捕縛状態から脱走した際のジムに注目すると、追手が迫る中、彼は銃撃で負傷した Tom を放置しての逃亡を拒否し、トムの傍に留まり続ける。その後、負傷したトムの往診に医師がやってくる。当初ジムは、捕縛を避けるために物陰に隠れていたが、危険を冒して、トムの治療への助力を医師に申し出る (288-89)。このような重大なジムの決断が下されるのは、医師の独白を通して、第三者の補助がトムの生死を左右する事実を確認した直後である。他方、旧南部の現実において、逃亡後に捕縛された奴隷に対する処罰は“severe”であり (Campbell 652, Stamp 171)、“hell” (Dempsey 170) にすら例えられた。具体的には、“lashed without mercy”、“brutalized by overseers” という処遇がなされた (Gara 278)。ジムは短期間に2度の逃亡を試みているが、逃亡を常習的に行った奴隷には足の切断の罰が与えられることが多かった (Johnson 604)。作中でも、再捕縛後のジムを処刑すべきという意見が、複数の村人から出ている (287)。そもそもトムの重傷は、フェルプス農場からのジムの逃亡が招いた銃撃による。そのような負傷によってトムが死亡した場合、逃亡奴隷に対する処罰の一般的な苛烈さを考えると、ジムはトムの死の責任を問われ、死刑は免れない。さらに、Mississippi 川の 1100 マイルに及ぶ南下によって (292)、自由州がある北部からは遠く隔たった地理的状况に加え、トムが uncle Silas に送りつけた警告文のため

に、周囲一帯は自警団が溢れている。その上、ハックの予定外の長時間の寝落ちゆえに、ジムはハックとの離別を予期せぬ形で強いられている。このように、ジムの逃亡が成功する可能性は極小化している。以上の、ジムが置かれた諸状況を勘案すれば、ジムによる医師への実質的な自首は、妥当極まりない判断であるといえる。しかも、医師の発言の通り、トムの治療へのジムによる補助はトムを落命から救い、結果的に、ジムの人間性への医師の評価を高めている。その結果、再捕縛後のジムは、医師から弁護的発言をなされ、致命的な暴力を回避できている (288-89)。やはり、ジムの判断の結果は、一致して彼の判断力の鋭敏性を際立たせる。このようなジムの個性は、下記の通り、奴隷の立場からの解放後も維持されている。

漂流家屋内でハックの父親の死体を一瞥したジムは、ハックに対して、“‘[D]oan’ look at his face—it’s too gashly’” (62). と述べ、死体の顔を即座に視認していた。その発言直後に、“Jim threw some old rags over him . . .” (62). との描写の通り、ジムは死体を大急ぎで布で覆っている。ところが、後に所有者の遺言によって自由黒人となったジムは、先の死体と遭遇した際の状況を、“‘[D]ey wuz a man in dah, kivered up, en I went in en unkivered him . . .’” (295). とハックに説明している（下線部は筆者）。ジムはこの発言より前に、故郷に残してきたハックの財産を父親が蕩尽している可能性がないことをハックに指摘している。この発言に対して、そのように判断できる根拠は何かをハックが執拗に問質したため、ジムは、漂流家屋内で目撃した死体が父親であった事実を洩々ハックに明かしている。ハックの質問の趣旨からすれば、ジムは、ハックが視認しなかった死体が実はハックの父親であった事実のみを伝えれば事足りる。つまり、ジムは会話の成立上、完全に不要な、発見当初の死体は布に覆われていたが、ジムがその布を死体から取り去ったとの補足的説明を、先の引用 (295) の通り、殊更に行っている。ジムによるこの補足的説明は、死体を視認していない立場からなされている、客観性の高いハックの記述に反しており、虚言である。実情は、ハックが父親の死を認識することを、死体の顔を布で覆うことにより、ジムは妨害していた (Cox 175)。そうであれば、ジムの妨害工作の巧妙な糊塗を、先のジムの虚言 (295) は目指している。(ハックの財産が残存していると判断できる理由—ハックの父親の死—の説明を、ジムが強く洩る点に関しても、同様の解釈が可能である。) このジムの虚言は、ジムの人間性へのハックによる評価を慎重に慮っての結果であり、自由黒人の地位を得たのちも、ジムは自身の保身を最大限図ろうとしている。奴隷時と変わることなく、発言の全てを自己保存に連ねようとするジムが、ここには指摘できる。

また、所有者 Miss Watson からの逃亡という、命を賭してのジムの行動がなされた理由は、奴隷商人へのジムの売却によって生じる、妻子との離別を回避するためである (55)。実際に逃亡中のジムは、妻子の所有者からの購入、あるいは、奴隷制廃止論者の助力を得ての強奪による、妻子との同居を目指していた。他方、ワトソン嬢の遺言によって奴隷の地位から解放されたのはジムのみで

(291)、ジムの妻はワトソン嬢の近くの農場に (110)、子供は別の所有者に (110-11)、変わらず奴隷として所有されている。終末部でジムは自由黒人となったため、妻子の強奪をも視野に入れた、家族の同居の実現を目指しての活動が可能となる。そのようなジムに reservation への同行を促しているトムは、過去において、ジムが自由黒人であることを知りながら、その事実を口外せず、個人的嗜好を満たすため、彼を奴隷として危険な遊戯に巻き込み、彼の命を再三危険に曝していた。このような過去の経験から、トムとの共同生活がジムに今後何をもたらすかを、聡明で理知的なジムは、容易に推測できるはずである。この状況にありながらもジムは、家族の再建計画に関して一切口外しない。つまり、その計画を筏で口外してハックの感情の致命的な硬化を招き、自己を危機に瀕させた過去を、ジムは慎重に踏まえている。その結果ジムは、reservation へ赴くというトムの計画に参加する素振りしか示さない (295)。さらにジムは、義務でもない苦役を強制され続けたにもかかわらず、トムから与えられた報酬に無邪気に歓喜している。このように、自由黒人となった後も、対白人の警戒心を極限にまで研ぎ澄まし、自己保存にとって最良の判断を的確に下すジムの姿勢には、終末に至るまで変化は見られない。以上の通り確認できた、恒常的に機能しているともいえるジムの判断力の鋭敏性は、ハックとの関係においても極めて有効に機能している。以下にこの点について考察する。

II ハックとの関係を変異させるジム

故郷在住時のハックは毛玉を用いた占いをジムに依頼する。その際に、ハックに対する労役提供の義務がない他者所有の奴隷であるにもかかわらず、ジムの労役に対する対価の支払い³をハックは渋り、現金を所有する事実を隠し、贖金しか渡さない (29)。この時点においてハックは、非所有者の白人に対しても奴隷は労役を無償で提供するのが当然であるとの世界観に立っている。ここには、奴隷制下における白人の人種的優位性に奴隷が盲従することを当然とみなすハックが認められる。類例は他にもある。

ハックは膨大な労力を傾注して自分が殺害されたと誤認させる設定を作り出し、追手が生じる可能性を消滅させ (45-46)、致命的暴力をハックに行行使する父親から逃れる。その後のハックは、自分の払った努力を無に帰す、他者による目撃を非常に警戒する (53)。実際に、無人島に逃れたハックは、焚火の形跡に気付いた際に極度の緊張感を示す (51-52)。さらに暗闇において、誰であるかを判別できない、睡眠中の人物と遭遇した直後にもハックは驚愕している (53)。ところが、その人物が旧知の奴隷ジムと判明するとハックは一転、ハックを認識していないジムに率先して語り掛

³ ジムは、貨幣の提供なしにはお告げを毛玉が伝えないという名目で貨幣をハックに要求する。その際、金銭を借しんでハックが贖金を渡すと、ジムは、ジャガイモに挟めば贖金は本物として使用可能となる旨、発言している。それゆえ、ジムは毛玉の要求を口実として、ハックからの金銭の獲得を目指している。

け、孤独を解消してくれる彼との遭遇に歓喜している。その上ハックは、父親からの逃亡の顛末を全てジムに説明し、自身の居所を他者に絶対に知られてはならない点を、無防備にジムに伝えている。つまり、ハックの意向をジムは無条件に酌んで、ハックの利益を侵害しない形で行動するとの前提にハックは立っている。やはり、奴隷制が規定する、人種間の序列にジムが盲従するとの世界観にハックは立っている。ところが、ハックが当然視している、彼とジムとの序列は、2人の旅程中に変異する。その点を以下に確認したい。

まず、道中のハックが農作物を盗む箇所に注目したい。その盗みは暗闇に紛れて行なわれ、誰からも視認される懸念がない(75)。その上、ジムは、ハックと一時的に離別した際に、逃亡に必要な食料や食器を、白人の目を盗んで独力で調達するだけの才覚を有している(131)。ところが、ハックのみが先の盗みを行い、ハックが調達した盗品をジムが消費している。このように、ジムに労役をハックが一方的に提供する状況を、ハックは違和感なく受け入れている。同様の例は、ハックから譲与された20ドルをジムは所持しているにもかかわらず、ハックに2人分のコーヒーを購入するように促す展開にも指摘できる(146)。以上の通りジムは、逃亡奴隷であるがゆえに、白人からの視認を忌避せざるをえない状況を巧みに利用し、ハックが一方的に労役を負担する在り方を、ハックに違和感なく受容させている。

以上のような、ハックとジムの関係の変異は、ハックが *slave-catchers* からジムを救う場面にも読み取れる。本場面において、ハックによる機転の結果、*slave-catchers* から40ドルをハックは譲与される(113)。40ドルの獲得は完全にハックの才覚に基づいており、ハックは全額を独占するのが当然である。しかも、ハックはジムを告発しようと固く決意しながらも直前で翻意し、巧みな話術によってジムを *slave-catchers* から守り、この時点でジムに対して最大級の利益を供与している。また、ハックは所持金全額を父親に篡奪されたと認識しているため(295)、金銭を潤沢に所有しているとの感覚は不在である。実際にハックはサーカスを無賃鑑賞し、儉約している(162)。これらの前提にもかかわらず、ハックは自発的にジムと40ドルを折半している。ここからも、ハックはジムを等位視している事実が読み取れる。他方、以前に漂流家屋から2人が持ち出したコートの中に、縫い込まれた銀貨8ドル分を見つけた際には、その折半がなされておらず(63)、ハックのジムへの対応は明らかに変異している。

さらには、詐欺師2人の道中への闖入後に、ハックとジムは詐欺師によって、夜間の見張りを折半させられている(144)。この、奴隷と等位に置かれる状況も、ハックは違和感なく受け入れている。例えば、見張りを折半せずに、ジムが単独で完遂してくれることを、謝意を表すべき状況とハックは認識している(170, 223)。他方、ジムも、睡眠中のハックを当然のごとく起床させ、労役をハックに分担させている(150)。ハックは、白人として逃亡奴隷ジムを告発できる立場にあるにもかかわらず、ジムの逃亡に協力しており、ジムは二重にハックに負い目を抱えている。この前提

があるにもかかわらず、奴隷制下にあつては例外的な、ジムを等位とみなす視点がハックに醸成されている。

その一方で、ジムが調理を行う形で、ハックに労役を一方的に提供し、奴隷本来の行動様式を示す場面もある (134)。この前にジムはハックと一時的に離別しており、その際に、ハックを引き受けている名家の奴隷から、名家の子息とハックとの円満な関係を聞き及んでいる。そのため、ジムは逃亡にハックが同行できなくなる可能性も視野に入れて、逃亡に必要な品物の調達を自力で行っている (131)。ジムが率先して調理するのは、その際に得た食材である。つまり、ジムがハックに提供しているのは、ジム単独での逃避行の際に想定される労役なのだ。他にも、ジムはハックが乗船せんとするカヌーを整備する形でハックに一方的に労役を提供するが (111)、その際のハックはカヌーで陸地へと移動し、現在地が北部への逃亡を可能とする場所である Cairo であるかを確認しようとしている。加えてハックは直前にジムの告発する決意を、“I says” (111) と、我知らず発声している。既に確認した周囲の静寂を考慮すれば、ハックの決意をジムが聞き取っている可能性は高い。そうであればジムは、ハックに芽生えた告発意欲を視野に入れ、労役の提供により、ハックの懐柔を目指しているとも解釈できる。ここでのジムによる労役の一方的提供は、ジムの利益（逃亡の成功）に寄与するものである。他場面の、無為のハックの傍でジムが率先して労働に没頭する様子を確認すると、筏の上の小屋の設置 (75) は逃亡するジムの周囲からの目視を困難にする。さらに、予備のオール作成 (75) は筏の機動性を確実化し、古カンテラをぶら下げる器具の作成 (75) も衝突事故の回避につながる。以上の通り、労役交換の形でなく、ジムが一方的に提供する労働は、自身の逃亡と強く関与する一貫性が伴っている。またジムは、Ohio 川を自由州へと北上する汽船への筏からの乗り換えを前提とした荷造作業に終日没頭している (114)。この間ジムは、ハックを等閑にして、自分の逃亡に係る作業に没頭している。このように、対ハックに関しては、奴隷の状況からジムは実質的に脱却している。旧南部の奴隷制下における、以上のようなジムの特殊な状況は、作品を精査すると、対ハックのジムの巧妙な対応の集積によって生成されていることが分る。この点を以下に明確化したい。

父親から逃れたハックは、所有者からの逃亡後のジムと夜間に無人島で遭遇する。ジムが所有者から遠く離れた無人島に1人で真夜中にいるのは、奴隷としてありえない状況である。しかしながら、年少のハックはジムが逃亡奴隷である事実を、当初は全く認識できない。このハックの現実認識は、彼が奴隷制の様態に関して無知である事実を伝えている。この点を察知したと考えられるジムは、ハックに生殺与奪の権を与えることに連なる、自分が逃亡した事実については、ジムがなぜ無人島にいるのかをハックに問われるまでは一切口にしない (53-55)。さらに、この実情を語る前には、ジムが伝えた内容を他言しないよう、ハックに確約させている。ジムは、事情を説明した直後にも、ハックが行なった確約を2度、強調している (55)。このように、ジムの逃亡の事実をハッ

クが把握することにより必然的に生じるハックの圧倒的優位性を、2人の人間関係の内部に留め置く工夫をジムは周到に展開している。

ジムとハックの関係に更に注目すると、ジムと遭遇直後のハックがジムに朝食の準備を促した際に、ジムは別話題を持ち出し、即座にはハックに労役を提供しない(53)。次いで、その別話題との絡みでジムは更に別話題を持ち出し、そこでハック所有の銃に言及し、その延長で、銃の使用による食料調達を巧みにハックに促している(54)。ハックは銃の使用には至らないが、結果的にジムは、食材等の運搬というハックによる労役との交換で、調理用の火を起こしている。その際に白人のハックが奴隷ジムに提供した労役の結果を、ジムは、魔法の魔法によってなされた業と指摘する(54)。つまり、白人が奴隷に労役を提供するという、奴隷制の理念に反する状況をハックが直視し難くなる発言を、ジムは慎重に行っている。その後、ハックは銃使用には至らないが、食材として鯰を釣り(54)、それをジムは捌いている。このように、ジムは再度ハックの労役との交換で、労役を提供している。その後ハックは、ジムに食物の手渡しを要求し、軽微ではあるが、ジムの使役を再度企図している(60)。ところがジムは、彼の知識によってハックが致命的な苦境から救われた数時間前の状況に言及し、ハックはジムに恩義を感じるのが当然である旨、強調している。その結果、ハックの命令へのジムの服従が再度、回避されている。他にも、その状況に至る過程は記述されていないが、荷物の運搬(59)も食事の準備(65)も“we”の主語が示す通り、労役がハックとジムによって分担されている。さらに別場面(136)でもハックとジムは、共同で食事を準備している。このようにジムは巧みな話術を駆使し、旧南部では一般的な、奴隷の白人への隷属状態から巧みに脱却している。加えてジムは、ハックが提案する食糧調達の手法の問題点を説得力が伴う形で指摘し(56)、知識の優位性も、ハックに巧みに印象付けている。以上の在り方に読み取れる、奴隷制が規定する人種間の序列の崩壊に対して、ハックは彼なりの対処を試みている。この点を以下に確認したい。

最初に、ジムが発揮する論理的思考力の卓越性をハックが把握する場面を取り上げたい(86)。その直後のハックは、書物で得た王族に関する蘊蓄をジムに開陳している。この話題は、先行する対話との脈絡を完全に欠いているため、識字力に根差した教養の優位性を誇示し、ジムから痛感させられた、思考力に係る劣位を挽回しようとするハックの試みと解釈できる。その際にハックは王の一例として、ソロモン王を引用する(87)。ソロモン王はジム自身が、不確実ではあるが情報を有している人物であり、ソロモン王に関する自分なりの解釈を、ジムはハックに伝える。その際にハックは、ソロモン王に関するジムの説明が誤っている事実気付くが(88)、ジムの誤解を、漠然と具体性を欠いた形でしか指摘できない。それゆえハックは、誤解に基づいた自説を正当化しようとするジムの饒舌さ、話術に押し切られ、結果的にジムの誤った説明の受容を強いられる。他方、作中において奴隷は、キリスト教信仰を白人所有者によって強制されている(16)。つまりジムは、奴隷

としての生活の中で得られた、僅かなキリスト教関連の知識を最大限利用し、教養におけるハックの優位性の生成を阻止している。

次にハックは、王の話題との関連でフランス語に言及し、さらには、フランス語を話せるかを、ジムに誤ったフランス語で問うている (89)。つまり、王に関する知識の点でジムの優位に立つ試みに失敗したハックは、手法を変えて、語学関係の知識での優位性を確認しようとしている。その際に、フランス人が非英語を話す事実には納得しないジムに対して、ハックは、人間と猫・牛とが、各々異なる発声を行う事実を援用して、ジムを納得させようとする。すると、そのような、異なった科に属する生物の発声様式の差異から類推的に、同じ人間科に属する、フランス人とアメリカ人の言語の差異を説明しようとするハックの視点の非論理性が、ジムによって理詰めで指摘される。ジムは、人間科内の国籍の差異と、牛、猫、人間といった科の差異とを同列視するハックの錯誤を効果的に指摘し、ハックは反論の余地を完全に奪われる。その結果、ハックは、フランス人とアメリカ人とが異言語で発話するという事実を指摘しているにもかかわらず、その指摘はジムに論破される (89-90)。このように、ハックは機転の鋭敏性と話術の卓越性の点で、ジムの後塵を拝し、ジムへの知的優位を確認しようとしたハックは、再度ジムの劣位に置かれている。

注目すべきことに、後に2人の道中に闖入してきた、フランス王の末裔を詐称する英語話者の詐欺師に、ジムは、フランス語の発話をハックの目の前で要求している⁴ (150)。フランス王の末裔が英語話者である点は、フランス人とアメリカ人とが同一言語を話すという、ハックとの論争時にジム自身が固執していた主張に合致する。それにもかかわらず、詐欺師へのジムの先の要求はなされている。つまり、ハックとの論争の際にジムが強固に反駁していた、フランス人はフランス語を話すというハックの主張 (89) にジムは一転して立脚し、詐欺師に対応している。この点は、フランス人の母語に関するハックの指摘が正論であると、ジムが密かに認識していたことを物語っている。そうであるならば、ジムがハックに挑んだ言語に関する論争は真実の追求を目的とはしておらず、ハックを論破し、話術や機転の面でのハックへの優位を誇示し、ハックに敗北感を体感させることが主目的であったと判断できる。ここには、奴隷制が正当化する人種間の序列の確認を目指すハックの意向を挫こうとするジムの姿勢が、再度指摘できる。つまりジムは、社会制度が規定する序列の形骸化を一貫して目指している。

その後、星が“happened”の状態なのか、それとも、“made”の状態なのかに関して、ハックとジムとの間に、意見の齟齬が再度生じる (136)。星が“made”の状態にあると考えるジムは、月が星を生んだと解釈する。これは、確固たる根拠に基づいて“happened”と捉えるハックの世界観と完全に衝突する視点であるにもかかわらず、ハックはジムに一切反論せず、“[W]ell, that looked kind

⁴ このジムの行動が、彼の逃亡にあたっての障害物を排除せんとするための巧妙な試みであることは既に指摘した。

of reasonable . . . because I've seen a frog lay most as many, so of course it could be done" (136). という発想の下に議論を収束させている。ハックは以前にジムとの間で意見の相違が生じた際に、2度論破されている (Chadwick-Joshua 43)。敗北後のハックは心中でジムの奴隷として痛烈に蔑視し、自身を慰撫しており、ハックが受けた屈辱感の強さが推測できる。しかもハックはそのような体験を、彼の倫理観に反する形で逃亡を幫助し、利益を提供しているジムから強いられている。この記憶ゆえにハックは、再度の屈辱感を回避するため、自説を放棄する形で、ジムの意見に賛同している。

ハックが脳裏においてジムの見解を正当化するのは、先の引用 (136) に見られた通り、月と星との関係を、蛙と蛙の卵との関係から、類推する視点である。しかしながら、この視点は、フランス人と非英語との関係を、人間の発話と動物の発話との関係から類推しようとした、かつてのハックの視点の再来である。つまりハックは、ジムによって論破された思考様式を援用して、自発的にジムの見解を正当化している。明らかにハックは、ジムとの見解の相違を回避することに腐心している。その後ジムは、流れ星を、腐敗した星の卵が投げ捨てられた物体と捉え、ハックの自説と衝突する解釈をさらに提示するが、ハックは全く異論を唱えない。以前には決して見られなかった、ジムの見解への追従的な対応がハックには生じている。加えて、以前にジムの主張に屈服していた時に表白されていた奴隷蔑視感情が、ハックにおいて消滅している。このようにハックは、ジムの頭脳の鋭敏性を前提として、ジムに対応するに至っている。以下の場面にも、同様なハックのジムへの対応を読み取れる。

ジムが決して知りえないアメリカ独立に関する知識の開陳を、ハックが展開する場面がある (168-69)。再度ハックは、教養面での優越性をジムに誇示せんとしている。この場面のハックは、ジムにとっての未知の話題を以前に持ち出した際とは異なり、大量の情報を間断なく披露し、ジムが介入してハックの主張を転覆する余地を全く与えない。顧みると、同様の試みをハックが過去に行った際には、悉くジムの弁舌の才によって反撃され、その結果、ハックは敗北感を痛感していた。この点を視野に入れると、ハックは意識的に、ジムの話術が威力を発揮する余地を完全に奪っていると解釈できる。つまり、例外的な長さで間断なく続くハックの饒舌の背後には、ジムの話術の卓越性に対してハックが感じている脅威を読み取れる。ジムに対して優位性の誇示をハックが試みる際には、ジムの機転の鋭敏性への警戒心が伴わざるをえなくなった事実を、ハックの饒舌は物語っている。

他場面で、霧中においてハックがジムと離別し、その後再会した折には、奴隷制下における白人の奴隷への優位性を前提として、ジムの嘘で愚弄せんとする (93-95)。直前に、ハックが議論で2回連続してジムに敗北していた点を視野に入れると、ハックはジムへの愚弄を通して、ジムに痛感させられた屈辱感の緩和を目指していると推測できる。しかし、その際のジムは、ハックに対す

る彼の情愛の篤さと、ハックの彼への不誠実さとの落差を効果的に指摘し、ハックから弁解の余地を完全に奪い去った形で指弾する。今回も、ジムの話術はハックの罪悪感を効果的に刺激し、その結果、ハックは15分間も躊躇するほどの苦渋の決断の末、ジムに謝罪する(95)。ここにおいても、対ジムの優位性の確認をハックは目指すが、ジムの機転と話術によって阻まれ、逆に、ジムとの等位性の受容に追い込まれている。

以上の通り、ハックの試みが、ジムの才覚ゆえに、逆効果に帰結する展開が反復されている。他方、ジムはハックの試みを逆手に取って、ハックとの間に社会制度ゆえに存在する序列を、形骸化し続けることに成功している。当然ながら、ハックがジムを奴隷として一義的に認識する度合いに比例して、ハックの告発意欲は活発化する。他方、ハックがジムを逃亡奴隷として認識する度合いが低下し、個人的知己としてのジムの存在性が高まれば、ジムへのハックの告発意欲は低下する。この常識的な視点に照らせば、ジムのハックへの対処の方向性は、彼の逃亡が成功を収める上で極めて適切なものであったといえる。

以上のジムの行動様式との絡みで、蛇皮に起因する祟りを、ジムが強調している場面にも注目したい(114)。この場面においてジムとハックは、ジムが逃げ込もうとしている北部への入口たるケーロを、自走できない筏で目指すが、誤って通過してしまう。ジムは、その事態を、ハックが蛇皮を不用意に触ったことに起因する祟りが招いたと主張する。続いてジムは、自責の念を覚えなようにハックに促している。つまりジムは、ハックの軽率な行動が、ジムの逃避行の頓挫を招いた点を巧みに印象付けている。しかしながら、そもそもハックは蛇皮の祟りの存在を知らなかった。(作中にはハックが蛇皮に触る描写も登場しない。) そうであれば、ジムは、北部への入口に相当する街を誤って通過したことの責任を、恣意的に案出したとも考えられる祟りの発想を巧みに利用して、全面的にハックに負わせている。このようにジムは、彼への罪悪感をハックに喚起する策略を弄している。同類のジムの試みは、他にもある。ジムはハックと遭遇した直後に、鳥の動作を手掛かりとして、降雨を正確に予見している(59)。他方、ハックはそのような洞察力を発揮できない。しかしながら、ハックよりも圧倒的に年長のジムが、天候の変化を予見するのに必要な知識の点で、ハックを上回るのは当然ともいえる。ところがジムは、“gittn’ mos’ drowned”(60)という悲惨な状況からハックを救済したのは彼である事実を、必要以上に強調している。以上の通りジムは、ハックのジムへの負い目を喚起する発言までも、巧妙に反復している。このような方策も活用してジムは、彼を密告し辛い心理状況にハックを誘い、かつ、人間関係における劣位の低減を目指している。本節で確認できた、ジムの緻密な計算に基づいた行動様式こそが、I節で確認できた、奴隷ジムをハックが自己と等位に位置づける、奇矯な現実認識の源泉であると考えられる。このように、逃亡奴隷であるがゆえに、白人に対して圧倒的に不利な状況に置かれているジムは、話術と機転の卓越性のみを手段として、ハックとの関係を等位に近接させている。以上に確認できたジムの

才覚は、ハックとジムとの人間関係のみならず、ハックの思惟を含めた内面世界に対しても多大な影響力を行使するに至っている。この点を以下に確認したい。

Ⅲ ハックの内面性に影響力を及ぼすジム

既出の通り、ジムは逃亡の事実をハックに告白する前に、ジムの発言内容を他言しないようハックに確約させ、告白後には、ハックが確約した点を2回、強調している。このようにジムに言質を明確に取られた結果、ハックは逃亡中のジムの告発が困難となる。しかしながら、ハックは確約に背かない範囲で、ジムの逃亡を阻害する行動を秘密裏に取り続けている。この点を以下に確認したい。まず、人目を避ける必要があるハックが訪れた無人島の Jackson's 島に、複数の人物が上陸している事実をハックは把握している (51-53)。そのようなジャクソン島に係留したハックのカヌーに荷物を放置すれば、それが発端となって逃亡中のジムの捕縛が生じる可能性が高まる。それと同時に、ハックが強く忌避している、父によるハックの再捕縛の可能性も高まる。それゆえ、ジムが主張する、人目につかない洞窟内への荷物の移動はハック自身の利益に沿う。それにもかかわらず、山の上り下りが頻発するという理由で、ハックは荷物の洞窟への搬入に難色を示す (59)。つまりハックは、自身の逃亡の成功以上に、ジムが捕縛される可能性の低下を回避することを優先している。

次いでハックは、難波船に遊戯心から乗り込もうとする (77)。当然、船内に船員が残っていた場合、ジムの捕縛の可能性が高まる。しかもハックは、ジムに300ドルもの高額の高懸賞金がかけられ、従って、ジムを追跡するためのビラが近辺に配布されている事実も、直前の章で把握している (68)。ジムは単なる逃亡奴隷ではなく、白人 (ハック) 殺害の被疑者とも誤認されており、特に人々の耳目を引く存在であることもハックは承知している。それゆえ、ジムの強い反対を無視して強引に難破船への乗船を主張するハックにおいても、ジムの捕縛の可能性を高めんとする意識を否定できない。このようなハックの心情は、ジムが乗っている筏の係留にハックが失敗し、筏が流出する事態を招いた場面にも指摘できる (91)。その場面では、操縦に慣れたハックが制御する小回りが利くカヌーですら、急流ゆえに島の土手と衝突寸前に至っている。操縦の経験がないジムが乗った筏は当然、極めて危険な状態に置かれる。実際にハックは筏の流出直後に、筏に1人残されたジムの事故死を予期している (93)。このように、筏の係留に関するハックの不手際は、ジムの生命を危機に曝し、ジムの逃亡が失敗に帰結する可能性を高めている。同類のハックの不手際は、以下の形でも認められる。

作品終盤のフェルプス農場の場面においてハックは、重傷を負ったトムへの往診を医師に依頼する (281)。トムの治療に向かう際に医師は、トムの処に赴く際に不可欠なカヌーが、ハックとの相乗りには耐えられないことを強調し、単独でトムの往診に向かおうとする。これに対してハックは十

分には反論せず、医師の単独での往診を許している。しかしながら、医師が乗船したカヌーは、この直前に、大柄な体格のジムと、ハック、トムの3名が乗船しても問題なく航行していた。従って、医師とハックの2名の相乗りが航行に支障をもたらす可能性はありえず、ゆえに、医師は虚偽情報をハックに伝えている。つまり、トムの負傷についてハックが行なった説明の不自然さに、医師は不審の念を抱くに至り (Maeda 5)、腹に一物を抱えたと思しきハックを排除しての往診を目指しているのが実情なのだ。そうであれば、虚偽説明であることが自明の医師の指摘を、ハックは優れた情報処理能力を有しながらも (Chadwick-Joshua 119)、受諾している。しかも、このハックの対応は、往診の際の医師にハックは必ず同行すべしという、トムの厳命 (279-80) にも反している。元来トムの命令には盲従するハックの姿勢が、ここでは例外的に崩れている。他方、医師は近隣に逃亡奴隷が潜んでいる事実を事前に把握している (289)。以上の結果、医師によるジムの捕縛の可能性は高まり、現実にはジムは医師によって捕縛されている。つまり、複数の点で不自然さが認められる、この場面でのハックの行動の本質は、ジムの捕縛の可能性を高める点にこそある。

以上の通り、明確には口外しないながらも、ジムの捕縛を心の奥底では期待するハックの心性が、彼の様々な判断や行動 (不手際) の背後に潜在している。そのような心性は、カヌーへの乗船を容易に拒否できるにも拘らず (Maeda 8)、見知らぬ、しかも大人数の追跡の対象となっている曰く付きの人物2名の乗船を許し、結果的にジムの捕縛の可能性を高めているハックにも読み取れる。他方、ジムは誰に捕縛されようと、彼が負わされているハック殺しの冤罪を晴らす必要に迫られる。従ってジムの捕縛は必然的に、ハックの生存と居所が郷里に知られ、再度、ハックが父親の暴力に曝される帰結に至る。この点をハックは把握している。なぜならハックは、ジムの行動が彼にどのような悪影響を及ぼすかを、些細な次元にあっても、瞬時に把握できた過去があるからだ (19)。このような状況にありながらも、ハックは一貫してジムの捕縛を潜在的に希求しており、ジムの逃亡への拒否反応の強さが読み取れる。このようなハックの感性は、以下の形で確認できる。

フェルプス農場から脱走後に再捕縛されたジムの処遇は過酷化する⁵。このようなジムへの処遇にハックは同情の念を露にしている (289)。一方ハックは、フェルプス夫妻 (現在のジムの事実上の所有者) がジムの処遇を決定している事実を、ジムより伝え聞いている (255)。それにもかかわらず、粗暴な村人の対ジムの暴力ですら緩和する (287-89)、トムの救命にジムが大きく献身した事実を、ハックはフェルプス夫妻に伝えない⁶。ただしハックは、その情報を aunt Sally に伝える意

⁵ ジムの処遇は、ジムを逃亡奴隷として詐欺師から購入したフェルプス夫妻が決定している (255)。しかし再捕縛後のジムの処遇を決定する際には、夫妻は負傷したトムの看病のため不在であった (287)。その結果、ジムの処遇への決定権を有してないはずの非所有者の村民の意向によってジムの処遇の過酷化が決定される。

⁶ トムの救命にジムが多大な貢献を行った事実を医師が村人に伝える際も、フェルプス夫妻はトムの看病に関わっており、その情報に接することができない。

向は示している (289)。ところがハックは、トムが被弾した事実を、なぜフェルプス夫妻に伝えなかったのかについての虚言を案出できないとの理由で、その情報のサリー叔母への伝達を遅延させている。しかし、虚言の迅速な案出に関する、ハックの能力の卓説性は何度も発揮されている (84, 112, 196, 224)。従って、ハックが述べる、遅延の理由付けは説得力を欠く。その上、ジムを救うための情報提供を遅延させる理由が後には、案出した虚言について、意識を回復したトムと口裏を合わせる必要に遷移している (289)。このように、ハックが述べる情報伝達の遅延理由は一貫性も欠く。加うるに、ハックがサイラス叔父に既に伝えた、トムとの行動に関する虚言は以下の通りである。ハックとトムは逃亡奴隷 (ジム) を遊戯的に追跡した際に、トムはハックと別れて所用で郵便局に向かい (その後、被弾)、2人は再度合流することなく、ハックのみがトムより先にフェルプス農場に帰着した (282)。以上の、ハックによる虚言においては、トムが被弾した現場にハックは居合わせていない。それゆえ、ハックがサイラス叔父に伝えた虚言に照らせば、ハックはトムの被弾について説明できる立場にはない。以上の通りハックは、妥当性を完全に欠いた理由 (しかも途中で変遷) を複数回持ち出すことにより、ジムの待遇改善に直結する情報の提供を遅延している。以上のハックの判断の結果、ジムの過酷な捕縛状態 (288) は継続される。

結局、ジムがトムの救命に多大な貢献を行った事実がフェルプス夫婦に伝わるのは、正確な時期は明示されていないが、再捕縛されたジムが所有者の遺言によって、自由黒人として拘禁から解放された後である。しかも伝達された際の状況は、“... when aunt Polly and uncle Silas and aunt Sally found out how good he [Jim] helped the doctor nurse Tom . . .” (294). と記述され、その伝達をハックが行ったか否かは不明である。このように、ジムの待遇を改善するハックという構図が読み取れない叙述をハックは採用している。ここにも、ジムの救済へのハックの消極姿勢が指摘できる。しかも、その直後に、“[uncle Silas and aunt Sally] give him [Jim] . . . nothing to do” (294). という形で、労役からジムが解放されたことが指摘されている。この記述から判断して、トムの救命への貢献が明らかになるまでジムは、自由黒人となった後も労役を課されている。つまりハックは、トムの救命へのジムの貢献をフェルプス夫妻に伝えない不作為によって、自由黒人のジムが不当に強制労働を課される状態を黙認している。このように、決して表出しないが、ジムの逃亡への確固たる処罰感情をハックは内に秘めている。

以上の、ハックのジムへの対応と通底するのが、ハックは、ジムに個人的な情愛を覚え (53)、人格を賞賛しながらも (223, 279)、家族の離散を痛切に悲嘆するジムに対する反応が、“I didn't take notice, nor let on” (170). と、極めて冷淡である点だ。その上、ジムの悲嘆を耳にしたハックは、“He was a mighty good nigger, Jim was” (170). と述べ、話題をジムの人物評価へと逸らし、彼の悲嘆と正対しない。他方、Wilks 家の奴隷とハックとの間には個人的な絆がない。加えて、詐欺師が行った、ウィルクス家の奴隷の家族を離散に至らせる奴隷売買は法的に無効で、家族の分離は数週間後には

解消される事実を、ハックは把握している。しかしながら、奴隷が家族離散の際に示した悲嘆に対するハックの同情の念は極めて強固である (195)。対照的に、先に確認した通り、個人的な絆の存在にもかかわらず、ジムの悲嘆にハックは冷淡であった。

以上の不可思議なハックの心理を合理的に説明する鍵となるのが、家族全員の同居を目指すためにジムが所有者から逃亡した事実を、ハックが把握している点だ (55)。つまり、ジムの家族愛の篤さと、奴隷制に対する反逆姿勢（逃亡）とが、表裏一体の関係にある事実をハックは認識している。ここで、ジムの逃亡（家族愛に端を発する行動）に対するハックの断罪意識を措定すると、家族愛に根差したジムの悲嘆への、ハックの不条理な冷淡さの説明がつく。やはり、ジムの逃亡を指弾するハックの感覚が確実に潜在している。この感情は、本節で確認した通り、恒常的にハックを支配しながらも、ジムの面前で吐露されることがない。その感情は、逃亡した事実をジムがハックに告白した際の、“Jim!” (55) というハックの一言にのみ僅かに読み取れる (Robinson, “Characterization” 214)。読者に対してすら、ジムの逃亡へのハックの指弾感情は、限定数、表白されるのみで (110-11)、ハックは自由に本心を吐露できてはいない。このようなハックの心理状態が生じたのは、ジムの熟慮に基づいた、告白直前になされたハックへの他言無用の確約の要求と、告白後に “Jim!” (55) と口走り、指弾感情を隠せないハックに対して、ジムが2度も行なった確約の強調ゆえである。さらには、社会が規定するハックとの序列を形骸化する試みを、ジムが機転と話術を駆使して実行し続けたためである。ジムの機転と話術の卓越性は、逃亡への告発意欲をハックが明確に意識化することすら阻み、ジムと読者に対して、本心とは異なった演技を続けざるをえない状況にまでハックを誘っている。ジムの逃亡に対するハックの本心の表出を完全に抑制できる状況を、ジムの思考力は創出している。

結語

本論で確認した通り、理知性と話術の卓越性が、ジムの存在の本質をなしている。この事実を、ハックは優れた観察力を有しながらも、直視できていない。そのようなハックの認識を例示すると、濃霧中の川面でハックと離別した際、物音を利用して居場所を伝えようとしないジムの、白人の視認を避けねばならない逃亡奴隷の立場を無視してハックは、“the fool” (92) と罵倒している。さらにジムとの論戦の際に、ジムの話術や機転によって敗れたハックは、“[Y]ou can’t learn a nigger to argue” (90). と内省し、奴隷は議論には馴染まないと結論付けている。さらには、詐欺師の実情をジムは把握できているにもかかわらず、その実情を知らせてもジムの理解力を超えるので、無意味であるとハックは内省している (142, 170)。ハックは一度のみジムの聡明さを認めるが、その際も、奴隷の中ではという限定を付け、相対的に評価を下げている (86)。あるいは、Judith Loftus からハックが得た情報を又聞きしたジムは、彼女から直接情報を聞き取っているハックですら推察で

きないロフタス夫人の行動について、説得力を伴う推論を展開している。この際もハックは、ジムの推論によって得られた結論に有意性はないと強弁し、ジムの思考力の価値を否定している (74)。以上のようなハックの、ジムの思考力への低評価が生じるのは自然な流れである。なぜなら、ジムは恒常的にハックの目前で滑稽で愚かな言動を反復しているからだ。例えばジムは、過去に詐欺によって、全財産を奪われた失態（真偽不明）を饒舌に語り、愚かなイメージを積極的にハックに印象付けている (57-58)。他にもジムは、ハックの耳に届く形で、滑稽な発言を連発している (19, 54, 86-87, 89, 95, 267-69, 271, 294-95)。

以上の通り、背反的な二面性をジムは内包しているが、当然ながら、愚かで滑稽な側面は、ハックの視線を意識した上でのジムの演技による創作である。なぜなら、現実の奴隷制下にあっては、聡明であると奴隷が認識されることは、身を危険に曝すことに他ならなかったからだ (Robinson, “Characterization” 219)。例えば、旧南部の現実においては、字が書けると判明した奴隷は指が切断されることもあった (Johnson 605)。このような過酷な奴隷制において生存を維持するために、演技が創出する滑稽性によって、自身の能力—白人の内面性に圧倒的な支配力を行使できるほどの卓越した機転と理性性—を完全に糊塗しているのが、ジムの人物像の本質なのだ。

Works Cited

- Beaver, Harold. “Run, Nigger, Run.” *Champion* 187-94.
- Campbell, Stanley W. “Runaway Slaves.” *Miller and Smith* 649-52.
- Chadwick-Joshua, Jocelyn. *The Jim Dilemma: Reading Race in Huckleberry Finn*. Jackson: UP of Mississippi, 1998.
- Champion, Laurie, ed. *The Critical Response to Mark Twain’s Huckleberry Finn*. Westport: Greenwood, 1991.
- Cox, James M. “A Hard Book to Take.” *Champion* 171-86.
- Dempsey, Terrell. *Searching for Jim: Slavery in Sam Clemens’s World*. Columbia: U of Missouri P, 2003.
- Gara, Larry. “Fugitive Slaves.” *Miller and Smith* 276-81.
- Hoffman, Daniel. *Form and Fable in American Fiction*. New York: Oxford UP, 1961.
- Johnson, Whittington B. “Punishments.” *Miller and Smith* 603-5.
- Jones, Betty H. “Huck and Jim: A Reconsideration.” *Leonard* 154-72.
- Leonard, James S., et al, eds. *Satire or Evasion?: Black Perspective on Huckleberry Finn*. Durham: Duke UP, 1992.
- Maeda, Johji. “Huck and Slavery: A Reconsideration of His Attitude towards Jim.” *Kyushu American Literature* 52 (2011): 1-14.
- Martin, Jay. “The Genie in the Bottle: Huckleberry Finn in Mark Twain’s Life.” *Sattelmeyer and Crowley* 56-81.
- Miller, Randall, and John Smith, eds. *Dictionary of Afro-American Slavery*. Westport: Greenwood, 1988.
- Nichols, Charles H. “‘A True Book—With Some Stretchers’: *Huck Finn* Today.” *Leonard* 208-15.

Adventures of Huckleberry Finn における Jim の人物像
— 奴隷制と Huck への Jim の対応を巡って

Robinson, Forrest. "The Characterization of Jim in *Huckleberry Finn*." *Champion* 207-25.

---. *In Bad Faith: The Dynamics of Deception in Mark Twain's America*. Cambridge: Harvard UP, 1986.

Sattelmeyer, Robert, and Donald Crowley, eds. *One Hundred Years of Huckleberry Finn: The Boy, His Book, and American Culture*. Columbia: U of Missouri P, 1985.

Shulman, Robert. "Fathers, Brothers, and 'the Diseased': The Family, Individualism, and American Society in *Huckleberry Finn*." Sattelmeyer and Crowley 325-40.

Smith, David L. "Huck, Jim, and American Racial Discourse." *Leonard* 103-20.

Stamp, Kenneth. *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South*. 1956. New York: Vintage, 1989.

Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. 1885. New York: Norton, 1999.

